

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第3章「制御不能」

「おまえ、海水注入はどした。」
 3月12日午後7時20分ごろ、福島第一原発緊急時対策本部の円卓に座る所長吉田昌郎(56)に、首相官邸に詰めていた東京電力フェロ・武黒一郎(64)が電話でそう尋ねた。消防車3台を連結した1号機への海水注水は午後7時4分に始まっていた。
 「やっていますよ。吉田は事なげに言った。
 「えっ」
 「もう始まっていますから」
 「おいおい、やってんのか。すぐ止めろ」
 武黒は原子力部門のトップも務め

指揮系統無視の命令



吉田昌郎所長は福島第一原発震災重要棟2階の緊急時対策本部で事故対応の指揮を執った
 ※2011年5月(東京電力提供)

海水注入すぐ止める

た先輩だ。原子炉を一刻も早く冷やさなければならぬことは誰よりも理解しているはずだった。
 「何ですか」。吉田は食ってかかった。だが武黒の反応はそれ以上に激しかった。
 「おまえ、うるせえ。官邸がグジグジ言ってるんだよ」
 「何言ってるんですか!」。吉田は一歩も譲らなかった。だが電話はそこでプツリと切れた。消防車3台で連続注水ができるようになったのに、止めるとはどついついことか。「違和感がありました。官邸からの電話で『四の五の言わずに止めろ』です

からね。指揮命令系統はどこにあるんだと」。吉田は後にそう語った。
 武黒は約20分前の午後7時ごろ、首相の菅直人(64)に、真水から海水注入への切り替え作業に1時間半以上かかると説明した際、菅から再臨界の恐れがないか検討するよう求められていた。
 再臨界とは燃料が溶けてウランの密度が高まるようなケースで、再び核分裂反応が起きるとだ。菅が言う。「海水注入までに時間があるといつから、あり得るかどうかがその間に検討してくれと言ったんだ」
 再臨界は海水にホウ酸を混ぜることで防げる。だが武黒としてみればそれを菅に伝える前に「実はもう海水注入が始まっています」とはとも言えない。それで吉田に電話し「止めろ」となったのだ。

この海水注入をめぐるのは、事故発生から2カ月余りたった5月、マスコミ各社が「政府筋」や「政府関係者」の語として「首相の指示で注水一時中断」と報じた。自民党は首相の過剰介入だと批判した。
 菅が振り返る。「海水だろうと何だろうと水を入れなきゃならぬ」とは分かっているわけ。そもそも始まっているとすら知らされていないのに、俺が注水を止めるはずがないでしょ」
 しかし現場指揮官の吉田は中断指示を「官邸の意向」と解釈した。絶対に注水を中断するわけにはいかない。
 吉田は官邸、東電本店、そして第一原発の全作業員をも欺く大芝居に打って出た。(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)